

# 地域の衰退 高校と防ぐ

## 島しょ部・山間部の自治体

地域が高校をより立て、高校が地域の未来をつくる。生徒数の減少に悩む島しょ部や山間部の公立高校と地元市町村が連携し、都会や県外などから生徒を集める取り組みが広がっている。無料塾の開講や寮費補助のほか、地域の特性をいかした学校づくりにも知恵を絞る。廃校になれば若者がいなくなり、さらなる地域の衰退につながりかねない、この危機感が関係者を動かした。



広島県立大崎海星高校へようこそ



8月10日朝、広島県竹原市の港。東京や大阪などから来た中学3年生と保護者ら20人がフェリーに乗り込んだ。30分ほどかけて着いたのは瀬戸内

見学ツアーで訪れた中学3年生や保護者に学校の魅力を話す広島県立大崎海星高校の生徒(8月、同県大崎上島町)

### ◆ 離島で見学ツアー ◆ 国際観光科を新設

海の大崎上島(同県大崎上島町)。島唯一の県立高校、大崎海星高校と町が協力し初開催した1泊2日の「島留学」の学校見学ツアーだ。参加費は1人1万円。町が飛行機代などを負担した。

一行が高校に着くと、生徒らが島伝統の太鼓の演奏で歓迎。高校側はU・Iターンして島で働く職人らを紹介する独自授業や校内の無料塾で大学進学にも対応できることをアピールした。

島外出身者向けの寮も紹介し、大林秀則校長は「進学先の選択肢として考えてほしい」と呼びかけた。大阪市から母親と参加した中学3年の女子生徒(15)は「色々な経験ができそう。通ってみたい」と話した。

町の人口は約8千人と、30年で約6千人減った。島内出身者が多い高校の生徒数は69人で、定員(120人)を大きく閉

下回る。広島県が一定の生徒数を確保できない県立高について、2018年度までの廃校も検討するなか、町は「高校の存続の将来に直結する」との危機感から、島外にまで目を向けた生徒集めに活路を見いだす。今年度は無料塾の運営費や寮費の補助に約3700万円を充てている。

人口減少に悩む市町村は地元高校存続の危機に直面しており、地域の特性をいかした高校づくりで協力するなどして生徒集めに取り組む。

上村愛子さん(36)ら多くの有名選手を輩出し、スキー名門校として知られる長野県立白馬高校(白馬村)。生徒数の減少で存続が危ぶまれていたが、白馬村などがスキーリゾート地の特色をいかした「観光学科」の新設や英語教育の充実などで県外からも生徒を呼び込む提案をし、県教育委員会が受け入れた。今春開設の国際観光科には、定員40人に対して県外出身者を含む38人が入学した。今後も東京などで説明会を開くという。北海道三笠市は、閉校が決まった道立高校を12年度から市立校に転換した。普通科高校から調理や製菓を専門的に学ぶことができる学校となり、今では道内全域から生徒が集まる。市は18年度、生徒が調理や接客をするレストランも開く予定で、卒業生の地元定着にもつなげたい考えだ。

地域と学校の関係に詳しい和光大の山本由美教授(教育行政学)は「従来は市町村と高校を所管する県教委の距離が遠く、市町村が統廃合を止めることは難しかった」と指摘。市町村による高校存続策を評価したうえで「生徒が通う3年間だけでなく、卒業後の就労や地元定着など、まちづくりや産業政策も意識した高校との関係づくりが欠かせない」としている。